

本号の表紙について ——フッサールの旧居——

現象学を論じる本号の表紙には、フッサールが晩年に住んだフライブルクの住居の写真を掲げた。建物には石板がついている。「哲学者エドムント・フッサール 1859–1938 現象学の創始者が 1916–1937 年にこの家に住んでいた」。



1916 年はフッサールがゲッティンゲン大学からフライブルク大学に正教授として赴任した年である。『フッサール年代記』によれば、彼はその年の 4 月 1 日にこの住居に転居している (Karl Schumann, *Husserl-Chronik*, Martinus Nijhoff, den Haag, 1977, S.486)。ローレット通り (Lorettostraße) 40 番地にあるこの住み慣れた住居から旧市街の東側、Schloßberg すなわち城山に面したシェーネッケ通り (Schöneckestraße) 6 番地に転居したのは 1937 年 6 月のことで、フッサールは転居の混雑を避けて 6 月末から 2 週間ほど近郊の保養地ブライトナウに滞在している。ナチスの治世下、フッサールは依然として研究に専念する生活を続けていた。1937 年 5 月 12 日には、自分が委員を務めている国際哲学協働研究所 (Institut für internationale philosophische Zusammenarbeit) がフランスのヨンヌ県のポンティニーにあるポンティニー修道院で行う会議に参加する許可を——当時の状況ではおそらく聞きとどけられない許可であろうが——学長課に願い出ている。しかしながら、同年 8 月 10 日にバスタブから出るさいに転倒してバスタブの縁でけがをした

のがもとで病床に就く。明けて1938年2月7日には夜勤看護婦に「私に許されているはずの一冊の本をまだ仕上げたいと思っているんだ」と語っていた。だが4月13日になると、看護婦には「私は哲学者として生きてきた。哲学者として死のうとするつもりだ」、夫人には「神が恩寵のうちに私を受け容れてくださった。神は私が死ぬことを許された」と告げるにいたる。フッサールが亡くなったのは1938年4月27日。翌々日の火葬のさいにフライブルク大学から参列したのは、ゲルハルト・リッターただひとりであった。

彼が長く住んだこの住居からフライブルク大学へ行くには、住居から少しばかり東に歩いて、シュヴィムバート通り (Schwimmbadstraße) に出て北行する。シュヴァルツヴァルトすなわち黒い森と称する山岳地帯のへりに位置するフライブルクは街中の通りにも澄んだ水が走る水路がめぐらされているが、このシュヴィムバート通りには南に控えた市の森林公園から下りてきた小川が通りの西側に沿って流れている。しばらく進むと、バスの行き交うクローネン通り (Kronenstraße) に出て、それからすぐにフライブルクの旧市街を貫くドライザム (Dreisam) 川に出て、橋を渡り終えたところを起点として北行するヴェルトマン通り (Werthmannstraße) を少し歩くとフライブルク大学である。私が旧居を訪ねた帰りにたどった道筋はこのようで、およそ20分の道のりだった。この道を選んだのは、それが最も近道で、おそらくフッサールは大学と住居を往き来するのに寄り道などあまりしなかったのだろうと考えたからだった。旅行者の私は旧居を訪ねる往路では、いささか道草を食って二筋東にあるギュンタースタール通り (Günterstalstraße) に残る19世紀末から20世紀初頭に建てられた豪華な家並みを眺めたり、小川に沿った小路にその名を示したアムゼルヴェーク (Amselweg) の標識を見つけだしては『論理学研究』のなかの「一羽のアムゼルが飛んだ」(*Logische Untersuchungen*, II/2, Max Niemeyer Verlag, Tübingen, 1980, S. 14) の一節を思い出したりしていた。

フライブルクの町はシュヴァルツヴァルトの森に抱かれて広がっており、ローレット通りからも南側の市の森林公園の森影が近くに見える。その景色がまた遺稿の一節を思い出させる。「部屋をあとにし、街路に出る。さらに新たな小路。村または町の反復、構成。このなじみの周囲世界はその地平が形成しなおされることによって崩壊する。あらゆる方向にさらに進んでいけば、いつも繰り返す家々の並ぶ小路が来るとはかぎらない。まばらな家々、庭が現われる——ついには開けた野が現われる。それゆえ、違った、まったく違った、なじみのないものとなるのである」(*Husserliana*, Bd. XV, S. 429)

(品川哲彦)